これが直接市の発展に結びついていないことは，鉄道の定期利用者数の増加に示されていた。人口の産業構造では，二次産業従事者が最も多く示されていたが，この定期客の増加からも，古河市の主な産業は，第三次産業であることが判明する。

商業機能は，小売業が主であり，隣接諸都市の中では企業化が進んでいた。

商業圏はアンケートにより決定したが，その決定基準は，客観性に乏しいが，隣接・二次的隣接町村を対象とし，その中でランクづけを行い，最下位のものを除外する方法をとった。アンケートの種類は3つあり，そのうち，この考察では市の商工会議所のものを中心にし，他を参考にした。その結果，県境にある行政的影響，利根川の分離性がみられた。

これは，バス路線，運行本数にもあらわれており，１０年前のそれと比較すると，北と東へは，のびているが，南へは縮小されていることがわかった。

一方このような勢力圏をもつ，古河市の商業は，古河市民の購買力の東京への流出がみられ，内側からゆらいでくるようすもみられるためその将来は容易でない。

以上すべての機能に東京の影響がみられたが，それが年々増大してゆく中で，単なるBed．townとならないための方向は整備計画に示されるように，総和村との合併に見い出されるであろう。

長野県白馬村地域の地理学的考察

高　木　道　子

白馬村は，長野県の最北西部，北アルプス白馬連峰の山麓一帯を占め，気候的には高冷地としての性格を持つ，耕地には狭い限界（耕地率7.1％強）を有する村である。

現在，産業別には農業就業人口が６０％以上で，農村として位置づけられようが，その割合は全国的な傾向に加うる観光経営拡大という近年の動きから，減少の一途を示している。

農業の内部は全村的にほぼ水稲単作経営であるが，歴史的には，古くより水稲を中心とした主穀農業が主流であったとはいえ，現在のような商品的主穀農業が営まれる以前は①近代以前より大正時代に至るまでは農耕用ということを主目的としつつの馬生産，②大正より昭和３０年頃までの間は，戦時中を除き，副業的な養蚕業，と収入の道を求めていたのである。そして昭和30年以降，農地の基盤整備，全県的な水稲栽培技術の革新，観光経営への傾斜等に伴なって，水稲作一本とする商品生産がすすめられ，現在に至ったのであるが，水稲作への一本化には，農業を行う上での自然にも交通にも恵まれなかったことが結果しているということもあろう。

さて一方，増加の一途をたどる観光に関する経営について，この村の「観光地としての利用度の変遷」という形でその足どりを辿ると，ほぼ4つの時期に分けることが出来る。つまり①近代以前より明治末期に至るまでの観光地としての利用ゼロの時期，②大正より昭和戦時体制に至るまでの，近代登山あるいはスキー導入というものが進展し普及し，白馬山麓が観光地として歩み出した時期であり，観光経営

の1つとしての民宿経営が出現・増加した時期。③戦後約10年の間，戦争で減少した客の復活の時期であり，民宿・スキー場数及び施設増加の時期。④高度経済成長政策下の現在に至るまでの時期で，生活安定，観光ブームに客数も急増，大資本による大々的な観光開発が行われ，受入れ体制充実，大型化と，全村的な観光地としての道を歩む時期。このような時期区分は又，全国的なスキー場発展の時期区分にも当ると言われる。が，白馬村の観光地としての利用拡大には，その立地条件の優位性がバックアップしていると言える。

観光地としての白馬村の発展は農業地域としての白馬村を変えていったことは言うまでもないが，全村的にみると，①農業人口減少と建設・商・サービス業の増加。②農家の兼業率増加（つまり民宿・建設業の職人）と兼業内容の変化。③農業の水稲作への一本化。④農業に対する考え方の軟弱化。等があげられる。

全村的な考察をふまえた上で，白馬村内の地域的な違いを考え，最後に地域区分を試みると，3つの地域に分けることができる。①観光主地域＝観光資源としての自然条件に恵まれ，観光地としての利用の起源も古く，又大資本導入により観光開発の行われた細野，および交通の要点となってきた四ツ谷，森上，を中心とする地域。②前述の自然条件，および交通条件に恵まれず，近年の学生村としての民宿経営も行われない，山間の農業に力を注ぐ地域＝農業主地域。③上述2地域の中間として，その位置あるいは自然条件から，計画しだいで今後①へ移行する可能性のある地域。あるいは①を移行しないで現在の中間的性格（むしろ②に近い）を推持すると思われる地域＝中間地域
に近い）を維持すると思われる地域＝中間地域

そこで結論として村の将来を考えてみるに，全村的な，通年の大型観光地化の意向からも，農閑期利用としての観光に出発した経営は今後，多くの地域で，農業を従とする経営に拡大し，観光地としての性格を強めていくとともに，その内容にも変化を加えていくと思うのである。

八ッ岳南麓の地理学的考察
（高冷地蔬菜と酪農を主として）

寺沢綺佐子

本論文の対象地域は八ケ岳南麓の山梨県に含まれる4ケ町村である。主として，農業を高冷地蔬菜と酪農に重点を置いて扱った。

八ケ岳南麓はいわゆる中部高冷地に属する地域で，夏の低温と，少雨を特徴としている。地形的には，小さい河川が数条に山麓傾斜面を刻み込み，複雑な起伏を呈している。しかも八ケ岳火山噴火の際の火山灰に被覆されているため，土壌は強酸性を示し，低品位である。つまり農業に対しての自然条件にはなに1つとして恵まれていないと言ってよい。しかしながら，この不利な諸条件下にあっても，農業は